

浪江町復興計画策定委員会(第3回まちづくり計画検討部会)議事概要

1. 日 時 平成25年8月28日(水) 13:30~16:30

2. 場 所 浪江町役場二本松事務所 大会議室

3. 出席者

まちづくり計画検討委員	33名(A:7名、B:12名、C:14名)
ファシリテーター	3名
有識者・オブザーバー	5名
事務局	5名

4. 議 事

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) 話し合い
 - ①事務局からの説明【資料2】【資料3】【別添1(差替え版)】
 - ②グループワーク テーマ:復興まちづくりの目標を考える
- (4) その他
- (5) 閉会

5. 議事概要

○部会長あいさつ

なみえ絆いわき会 大波大久部会長

- ・今日は第3回検討部会ということで、大変忙しい、残暑厳しい中にご出席頂き、ありがとうございます。
- ・私も浪江町に1週間に3回くらい行っているが、国道6号線周辺が草を刈られており、少し浪江町も変わってきたかなと感じている。
- ・8月が間もなく終わり、今年も後4カ月となるが、少しでも形になるように話をまとめていきたい。
- ・また、第2回まちづくり検討部会の議事録を読ませて頂いたが、皆さんのそれぞれの熱い思い、意見があり、この中から抜粋し、最終のとりまとめとしても良いのではないかと思うくらいであった。
- ・これらの意見も参考にし、また、我々のまちづくり検討部会の資料が今後の成果等に十分に役に立つのではないかと考えている。
- ・今日は有意義に議論して頂ければと思っているので、一日よろしくお願いします。

○事務局からの説明

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・前回に引き続きまして、ファシリテーターを務めます高崎経済大学の櫻井です。併せてBグループには遠藤、Aグループに青木の3名で今日は進めてまいります。どうぞよろしくお願い致します。
- ・今日は最初に事務局からいくつか説明がある。
- ・説明の中身としては、大きく3つの柱があり、一つ目は前回（第2回）の部会の議論の中で出てきたたくさんの意見を整理し、どのような論点が出てきたのかということについての説明である。
- ・二つ目は、このまちづくり検討部会に並行して、県外に避難されている浪江町民の方を対象に、まちづくり計画についてのご意見を聞く場として、8/4に東京の芝浦工業大学で懇談会を開催した。その時の意見を整理したものの説明である。
- ・三つ目は、それを受けて、今日、この限られた時間の中で我々が何を議論するのか、今日の議論のテーマ、論点についての説明がある。
- ・以上、大きく3つの柱について事務局から説明があるので、お手元にある資料と合わせてお聞き頂ければと思う。

〈事務局説明〉

○質疑応答①

委員

- ・第2回部会において、論点が15分野にまとめられたということであるが、いろいろな改善を行っていくときには現状把握が欠かせないと思うが、15分野の中にはその項目が入っていない。
- ・議論していく中で、決定している事項を変更してまでも実現させていくのか、そういった対応が問われてくる。
- ・よって、現状把握の中でどのような項目をリストアップするべきなのか、リストアップしているのか、それについて事前に委員の皆さんにお知らせをしてほしい。

委員

- ・説明の最後に仮置き場の話があったが、東北電力の原発予定地を仮置き場として活用するという点について、浪江町と東北電力で話し合いをしているという新聞報道があったが、それについて説明をお願いしたい。

委員

- ・説明のあったまとめり方、進め方は結構だと思うが、第一次計画とのつながりがよくわからない。
- ・堤防や保安林、ソーラー等、各項目において具体的に動いている段階にあるようであるが、我々が今やっていることは、昨年の一次計画の概念の続きみたいなものを議論している。
- ・第一次計画の枠組みを明確に示した上で、それぞれの項目を一度まとめて、議論していく方法があるのではないかと思う。

委員

- ・この部会におけるグループ分けには、どのような意図があるのか。また、このグループで今後どのように課題を検討していくのか、その点について教えて頂きたい。

事務局（復興推進課 近野副主査）

- ・ご質問について、例えば、皆様から出た意見が現時点で法律において認められていないから駄目だというような見方はしたくないと思っている。
- ・皆様からのいろんな意見を聞いて、法律が必要なもの、必要でないもの等、事務局で一度整理を行い、法律の改正が必要であれば改正できるかどうか等、有識者の皆様も含め、検討していきたいと考えている。
- ・次のご質問について、本日説明させて頂いた話は災害がれきに関する仮置き場の話であり、それについては沿岸部ということで予定されているようである。
- ・除染の仮置き場との整合性については、この場ではっきりと申し上げられない。
- ・委員からのご質問については、確かに第一次計画の方で、具体的に議論をして頂いており、今回はもう一度それをなぞっているというような面もある。
- ・昨年度の復興計画策定委員会のふるさと再生部会の方については、第一次計画の内容をかなり理解されているものと考えているが、それ以外の委員の方もおり、時間や手間がかかってしまうが、このような考える作業を行いながら、皆さんと一緒に計画をつくっていきたいと考えている。
- ・次のご質問、グループ分けについては、部会長や副部会長からご意見を頂き、前回は年代別にさせて頂いた。
- ・前回実施してみて、やはり年齢が近い方が思いや意見が近いので、議論も盛り上がったのではないかという部会長等からの意見も踏まえ、今回も前回と同様に年代別で分けさせて頂いている。
- ・次回以降については、年代別が良いのか、具体的なテーマ別が良いのか等、部会長・副部会長、有識者の方々、事務局で検討させて頂きたい。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・補足説明をさせて頂くが、津波被災地の再生については別に動いている部分はあるが、復興計画第一次計画で、ある程度の方向性が出ており、今のところ、その方向性で動いている。
- ・ただ、まちづくりとしては、津波被災地も含めたまちづくりとなるので、今後は津波被災地の再生との連携等、情報提供を行いながら進めていきたいと考えている。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・前回、第2回の部会の記録を見て頂くとわかると思うが、例えば除染の問題について、除染が進まなければ何も進まないという意見がある中で、特に若手から出た意見であるが、除染のことは一度横に置いて、まちづくり計画の議論を前に進めようということをご皆さんで確認したと思う。
- ・今日もその前回の話し合いに則って、前に一歩進めていくようにしたいと思う。
- ・その上で、一次計画との関連の話もあったが、細かい具体的な話については、調整を行いながら進めていかないとならないということをご確認させて頂いた。

〇話し合い

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・今日の話し合いは「まちづくりの目標を考える」ことが最大のテーマである。
- ・まちづくりの目標といっても、事務局から説明があった通り、平成29年3月時点でのまちのあるべき姿・目標というものと、もう少し長期的な視点に立った目標ということで、二段階で議論することとする。
- ・まずは第一段階として、長期的な目標を議論することとするが、長期という言葉は非常に微妙なもので、20年後なのか30年後なのか、それぞれ人によって捉え方が異なる。
- ・よって、いつまでという区切りはせずに、長期的な目標ということで、これから浪江町がどんな町になっていくべきなのか、なりたいのかということを中心に描いて頂く。
- ・第二段階として、第一段階で議論した長期的な目標を前提としながら、それまでに必要な取り組みは何かということを中心に議論して頂きたい。
- ・復興計画の中では、平成29年3月を中期ということで位置付けており、この後の各グループの進行の中でも中期という言葉が使われると思うが、そのことは改めて確認させて頂きたい。
- ・また、前は最後にグループごとの発表を行うという形で、全体の意見の共有を図ったが、今回は発表ではなく、違うグループに移動して頂き、それぞれのグループでどのような議論があったか話を聞いて頂き、またそれをグループに持ち帰って議論をして頂くという進め方を考えている。
- ・詳しい説明、段取りについては、休憩後に説明を行う。
- ・最後に、ファシリテーターからのお願い、今日の話し合いのこだわりとして、まちづくりの目標や平成29年3月時点の目標については、皆さんそれぞれ描いているものが違うと思う。
- ・今日はその違いについて、はっきりさせたい。違いがあるということを確認し、その違いについてお互いが共有するというところに力点を置きたいと思う。
- ・よって、一つの意見に収れんさせずに進めたいと思うので、ご自身の意見、お考えを言って頂き、自分とは違う考え、まちづくりの在り方もあるんだなということを中心に共有して頂きたい。
- ・今日はその点についてこだわって進行していきたいと思う。
- ・今日は各テーブルに、有識者の鈴木先生、鎌田先生、それから事務局のサポートでお越し頂いている間野先生がいらっしゃるの、それぞれのグループを見て頂きながら、いろいろとサポート頂くことになっている。
- ・以上についてご確認頂き、各グループでの話し合いを進めて頂きたい

【Aグループ】

■「まちの将来像を考える（長期的）」について

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・今日の論点についてであるが、説明があった通り、大きくふたつある。
- ・まずは、前回は皆さんからご発言頂いていたので、その繰り返しになってしまうかもしれないが、将来像について考えて頂きたい。
- ・皆さんから出して頂いた将来像を踏まえて、平成29年3月のまちの状態としてどうあったら良いのか、そのためには何があったら良いのか。

- ・皆さんが描かれた将来像をどう実現していくか、時間軸も踏まえながら、お一人お一人整理して頂きたい。

委員

- ・まず質問したい点であるが、いろんな部会の中で、まちの将来像というものは出てきている。
- ・特にこの1カ月間、津波被災地等、それぞれのセクションで具体的な取り組みが出ており、動き出している中で、我々の議論は意味があるのか。
- ・例えば、漁港については再生するという方向で動いているが、町民にとって本当に必要なのか、再生しないといけないのか、そういう議論が必要ないのか。

委員

- ・それを言ってしまうと、皆が帰れなくなる。
- ・残っている船があり、将来つくる人もいる。

委員

- ・しかし、宮城県では漁港を集約しようという話もある。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・今の話は、町の個別の事業がどのように進んでいるのか、町がもっと情報発信しないと我々は話を進められないよということではないか。そのように位置づけておいたら良いのでは。

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・今のご質問について、何か具体的に答えられることがあればお願いしたい。

事務局（復興推進課 近野副主査）

- ・ご質問のあった個別の事業とまちづくりの整合性という点については、役場庁内でも問題になっていることである。
- ・我々が進めているまちづくりの全体的な議論を行ってから、個別の議論を進めるという方法もあるが、全体の議論を待たせられない、個別に動けるところから進めようというのが現状である。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・復興事業として、5省庁40事業があるが、この個別の事業については、動けるものは、どんどん進んでしまう。
- ・一方、浪江町でやろうとしていることは、これらの事業には当てはまらないものがたくさん出てくると思うし、個別に動いたら困るというものが出てくる。それを国にぶつけていくのがこの部会の役割ではないか。
- ・省庁ごとの縦割りの中で、個別の事業がバラバラに動いていくのに対しては歯止めをかけないとならない。まちづくりをトータルで見て、それらを調整していくことが重要なことだと考える。

委員

- ・個別の事業が町民の都合でなく、国の都合で動いている。
- ・建物の除染についても、被災していない建物を先に除染し、その後に被災している建物を壊すという話が環境省からきているが、順番が違えば、除染の同意はしない考え。

委員

- ・国のやり方、県のやり方、役場のやり方、それがおかしいと文句を言っている間に、それぞれの事業が進んでしまい、我々は取り残されてしまう。
- ・総論的な我々のコンセプトをまとめて、国に提示していかないとならない。

- ・細かい議論をしていくと何日もかかるし、ここでは総論的なことを議論し、まとめていくしかない。

委員

- ・そのことについては理解している。

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・前回は除染の話が出てきていたが、今回の部会においては、それは切り分けて、議論を前に進めていこうということで確認させて頂いたと思う。
- ・ただ、町に伝えておきたいこと、いろいろな思いがあるということとして受け止め、町の方でも対応を検討して頂きたいと思う。

委員

- ・除染の話は大元の問題であり、末端の部分で議論してもどうにもならない。

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・ではまちづくりの将来像について、ご意見をお願いします。

委員

- ・どんな町づくりを目指すのかというと、町民の帰還しない町づくり。
- ・優先として作るべきものは、J ビレッジが廃炉作業員等のための南の玄関口となっているが、北に玄関口がない。
- ・よって、作業員等のための拠点を北に作るべきだと思う。それをベースにまちづくりをしていったら良いと思う。
- ・また、権現堂地区の再開発、更地化による新しいまちづくりが良いのではないか。除染もできる。

委員

- ・震災前の浪江町を目指す。
- ・具体的な町づくりの考え方としては、若い人は働く場がないので、企業誘致をしていかないといけない。メガソーラーより企業誘致だと思う。
- ・人が戻るためにはインフラの整備が必要。

委員

- ・目指すべきまちとしては、震災前の浪江町が垣間見えるまち、そういう雰囲気が醸し出されるまちになっていること。
- ・子供たちが最終的に戻り、学校が存在する姿。

委員

- ・学力が向上できる町。東大に入る子供が日本一であるということになれば、町のアピールになるのではないか。
- ・その他、研究施設の誘致も必要。
- ・子供たちが戻ってこれる環境づくりが将来的に必要なってくる。

委員

- ・一度に住む町には出来ない。10年、20年かけて町を戻していくしかない。
- ・しばらく産物は難しいと思うので、景観を考える町づくりが良いと思う。最初は、観光や浪江町の人が帰ってきて心落ち着く場所として、例えば、コンクリートを使わない丘みtainな防潮堤をつくるとか、防災のモニュメントをつくる等、皆さんが綺麗だと思える町をつくる。
- ・景観づくりの町にすれば、人は戻ってくるのではないか。

委員

- ・原発事故を乗り越えた町として、アピールできる町を目指す。
- ・他の町から視察にくるような町。
- ・近隣の市町村を見ても、浪江町がその可能性が一番高いのではないかと思う。

委員

- ・高齢者施設が充実している町。
- ・長期的な話ではなく、短期的な話でみると、高齢者は帰還意向がある。
- ・税収もないし、切り詰めた形での復興とするしかない。
- ・最初のうちは高齢者が住みやすいという町を目指し、従業者は通いの形をとる。
- ・あくまでも、最終的なものではなく、徐々に町として進化していけば良い。

委員

- ・今まで浪江町は全国的に見て、特徴のある町ではなかった。
- ・原発が近くにあり、作業員、関連会社等の雇用の場があり、普通に生活できた。そのことは否定できない。
- ・よって、雇用の場が絶対必要。
- ・メガソーラーについては、雇用はあてにできない。今までエネルギー関係の企業を誘致してきたという経緯もあるので、石炭をガス化する火力発電所の誘致が良いのではないか。
- ・かなりの雇用が見込まれ、人が増えるのではないか。

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・今まで出た意見として、どのようなまちづくりを目指すかという点については、町民が帰還しない町づくり、震災前の浪江町がかいまみれる町、子供が戻って学校が存在する町、徐々に自然や景観が整っていくような町、原発事故を乗り越えた町、高齢者施設が充実している町等がある。
- ・まちづくりの考え方として、そのためには北側の拠点という機能を持たせていく、働く場としての企業の誘致、企業のみならず観光施設や研究施設、その他いろんな施設の誘致が必要なのではないかという意見。
- ・漏れていたり、ニュアンスが違うところはありませんか？

委員

- ・ゼロエミッションのまちづくりということで、循環型まちづくり。
- ・原子力以外のあらゆるエネルギーの地産地消を目指し、これを売りに産業を興していく。

■「中期的なまちづくりの目標を考える（H29.3）」について

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・次の議論に移りたいと思います。
- ・これらの将来像、まちづくりの目標を前提とした時に、平成29年3月までに具体的にまちの状態としてどうあったら良いか、また、平成29年3月までに可能な取組み、必要な取組みとして、皆さんなりに考えられることを意見として頂きたいと思う。共通する優先する順位のものもあれば、形というよりもソフト的なものもあると思うが、ご意見頂きたい。

委員

- ・Jビレッジの中でやっているようなものができる「北」の作業拠点が必要。

委員

- ・平成 29 年 3 月のまちの状態としては、本格的ではなくても先行できる産業が動いている。
- ・低線量地区に人が住み始めている。

委員

- ・町の主要部分について、野生の住処にならないよう、ジャングル化を食い止める。これ以上朽ちないようにして、街並みを綺麗に整える。
- ・町内コミュニティを確立しておく。町内コミュニティが確定していても、ジャングル化していたらどうにもならない。

委員

- ・企業誘致に関連するが、風評被害がつかまとうと思うので、企業に有益な情報を発信していく取組みが必要。
- ・風評被害防止策。
- ・情報発信が全体的に不足しており、それも含めた情報発信という意味もある。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・この中で高線量地域の人はいらっしゃるか。
- ・高線量地域の人達の立場に立った時に、復興まちづくり、中期的なまちづくりを皆さんどのように考えていくか。
- ・それがあまり出ていないのではないか。

委員

- ・議題の中で復興拠点と出てくるが、何が復興拠点なのかというのが良くわからない。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・今日の資料にも、参考ということで復興拠点については書いてある。廣坂委員の意見も出してもらえれば良いと思うが、第一次ビジョンの時にも、お墓参りをしたい人、年中行事をやりたいという人がいる時に、低線量のところに短期滞在型施設があれば、津島等の高線量地域の人でも利用できる。
- ・避難指示解除準備区域の中で、最大限できることは何なのか、それが平成 29 年までの一つの要素になってくると思う。

委員

- ・短期的に宿泊できる施設。

委員

- ・滞在型の施設をつくるということは、住民に限定したものでなくても良いのではないか。
- ・作業拠点をつくる場合も生活する場は必要になってくるので、町民にこだわらなくて良い。
- ・人口が何人戻ってくるかということにこだわらず、ゼロから組み立てようというのが良いのではないか。

委員

- ・低線量地域にいろいろな所から人が来てもらうためには、何かアピールできるものがないと来ないのではないか。
- ・上野原等、高線量の地域についても、そのまま良いのかということも考えないといけない。
- ・低線量地域及び高線量地域、両方について並列的にやっていかないとならないのではないか。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・津波被災地については、防災集団移転事業により移転することができるが、津島、大堀等の高線量地域については、同じように移転できるような事業がない。
- ・浪江町としてこのような現状を発信していかないと、高線量地域の人達は路頭に迷うことになる。これらについて考える必要がある。

委員

- ・環境省の考える除染のプロセス、賠償のプロセスだけでは、再起できない人が多くいる。
- ・そのような人をケアするために、何ができるのか。それを考えた時の一つが更地化であり、足りないところを補ってくる事業、再生できる事業として、他の予算を持ってこれる事業だと考える。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・震災前の浪江という意見があったが、震災前の人口は減少傾向にあり、商店街は櫛の歯が欠けたような状態になっていた。
- ・そのような町に戻すのではなく、人口減少を踏まえながら、新しい町を残していかないとならない。そういうことを考えないと魅力的な話にならないと思う。

委員

- ・土地の所有権の再配置ということも踏まえて、常磐線から海側の建物を解体し、更地化して新しい町をつくる。そうしないと、街並みとして再生できないのではないかな。
- ・今の法制度で何ができるか、できないのであれば、法制度を変えていかないとならない。
- ・また、再建するために必要なものは何か、今のシステムで得られないものは何なのか、それは明らかになっていると思うので、何を生み出していったら良いのかをまちづくりとして考えてほしい。形にしてほしい。
- ・町をつくるためには税金が必要。町民が帰るとか帰らないとかよりも、どうやって収入をあげるかということがベースになり、町を再建していく。

委員

- ・土地から収益を得ないとならないという視点からメガソーラーが選ばれた。そういう意味では少しずつ進んでいる。
- ・税金は必要であるが、それだけでも駄目だと思う。

委員

- ・低線量地区に高齢者住宅（福祉サービス付）。

【Bグループ】

■「まちの将来像を考える（長期的）」について

地域デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・まちづくりの目標を考えるために町の将来像を議論して頂きます。
- ・どのような町にするか、町づくりの考え方はどうするのか、といったところを意見として出して頂きたい。
- ・まず、各テーブル3人で議論して、各自意見を書き出していってください。

委員

- ・子どもと一緒に暮らせる、ごくあたりまえの町にしたい。

委員

- ・現実的に考えると、廃炉に向けた技術都市、北の最前線基地の町。

委員

- ・4次総合計画に基づく町づくり。プラスαで復興をもちこむ。

委員3名

- ・3人の意見として、家に帰れてももう住めないなので、修理よりも取り壊して新しい町を創る。
- ・既に町の住民は高齢化していた。アンケートに見られるように1/3程度の人口で高齢化の先進の町。

委員

- ・普通に生活できる町。

委員

- ・今の子供たちが引き続き町のことを考えることができる環境を残したい。

委員

- ・一度、更地にして新しい町とする。

委員

- ・コンパクトシティー等新しい計画として、あるエリアの中で完結して、他の町にいかなくても済む町。

委員

- ・子供たちの元気な声が聞こえる町。小学校のきれいな芝生のある町。

委員

- ・浪江の良さは、親切、思いやり、物を贈り贈られるなどの習慣であり、古い慣習がいいということを世界へ発信できる町。
- ・独立国のような町、老人を大切に作る町。
新しいものを作るのではなく、古き良きものを受けつぐ町。

○質疑

委員

- ・委員で将来像について意見を出したが、役場はどのように考えているのか？4次計画を生かすという意見もあるが。

事務局（復興推進課）金山係長

- ・4次計画の実現、実施はそのままでは難しいと感じている。これが理想像だというものはない。皆さんと一緒に考えて行きたい。

■「中期的なまちづくりの目標を考える（H29.3）」について

地域デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・目指す町として、どこからはじめたらいいのか、平成29年3月に帰還する時の町の状態はどうあるべきか、そのための取り組みについて具体的に皆さんで話し合ってください。

委員

- ・新しく都市計画を立てる必要がある。インフラ整備など1から見直しが必要ではないか。

委員

- ・70～80代が浪江に戻りたい人たちなので、老人施設を作る必要がある。

委員

- ・最優先の取り組みは老人への対応。
- ・一時宿泊できるような施設。
- ・帰還へむけて活動している人、事業者が1人でも多くなるような取り組み。
- ・高齢者の気持ちによりそった支援をしていきたい。

委員

- ・町内での復興住宅が必要。
- ・医療関係の施設。

委員

- ・原発作業員の宿舎、研究機関の誘致。

委員

- ・低線量区域に復興住宅、買い物等できる商店も併せて整備。
- ・町内で商業が立地しないなら、相馬までバスを運行させる。

委員

- ・新しい都市計画、インフラの整備。

委員

- ・平成29年3月までにインフラ整備ができてないといけない。

委員

- ・住民への公平な利益分配、弱者への配慮、町外も同時に考えないといけない。

委員

- ・太陽光発電の利益を分配したらどうか。

委員

- ・中期については平成29年3月までに考えるということか？

地域デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・平成29年3月までに形にするために何が必要かを議論する。

委員

- ・避難先よりも少しでも暮らしやすくないと戻らないだろう。
- ・震災の影響で河川の状況が変わっている。意外と忘れがちであるが洪水が不安。

住まいの研究所 鎌田一夫有識者

- ・平成29年3月から町に住んで生活をスタートするためには、都市計画まで戻ってのインフラの見直しは困難だと思われる。

委員

- ・平成29年3月までには住めるようにするための復旧は進めている。

委員

- ・1人でも帰りたい人がいれば帰れるように支援してあげなければいけない。

委員

- ・区画整理を行ったらどうか。

委員

- ・集まっているいろいろな意見を出しても反映されないのはどうしてか。

委員

- ・町のHP等、町民への周知が足りないのでは？進捗を知らせるために現地から発信してはどうか。

【Cグループ】

〈C-1班〉

■「まちの将来像を考える（長期的）」について

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・一つ目のテーマ「まちの将来像を考える（長期的）」では、何年後、何十年後という設定はしていない。浪江町がこれからどんな町になってほしいか。夢や希望なども語ってほしい。
- ・二つ目のテーマ「中期的なまちづくりの目標を考える（H29.3）」では、平成29年3月までにどんなまちになっているのか、どういう取り組みが必要なのか、現実的なことを語って頂きたい。

委員

- ・日本一環境にやさしい町にする。放射能に汚染されていることが世界中に知れ渡っている。その裏返しとして、10年間でこれだけ環境が改善した、と言われるような町にしたい。農業で有機ネットワークを使うとか、CO2を出さないとか、環境に関わる多岐に渡る分野において日本一を目指す。日本一にすることによって、他の地域、諸外国からの来訪者が期待できる。
- ・浪江町だけでなく、双葉郡のベルト全域を自然エネルギーでまかなうような裾野の広い産業を振興し、若い人にも関わってもらい、地域住民だけでなく、色々な人が入ってくるようにする。60・70代の人たちだけでは稼げないので、新しい産業振興によって、若い人たちにも戻ってきてもらい、地域の生活を支えていく。浪江町、双葉町、大熊町、楡葉町も含めてどういう風に活性化するかが大事だと思う。

委員

- ・産学を通じたまちづくり。そのためにはまず学校。大学がほとんど無いので、研究機関などを誘致し、産学でまちづくりを進めていく。
- ・もう一つは、経済特区を導入したまちづくり。経済特区に産業基盤をつくる。汚染された森林を活用したバイオマス発電事業と関連事業。
- ・その他に、オランダ型の農業経営。ハウスで栽培をし、パソコンで管理をしていく。夢のある農業をやっていききたい。10、20、30年先の長期的なスパンでこういったことを考えたらいいのではないかな。

委員

- ・安心・安全に生活できるまち。放射能問題のない元の生活ができるようなまち。
- ・元に戻るような山・川・海のある自然豊かなまち。

委員

- ・やはり除染の観点から話したい。高速道路から東側は、町全体の面積の20%になる。線量、予測される人口等を考えると、ここを第一段階の町とし、町の全人口をシフトすることを検討したい。第二段階としての高速道路から西側をどうするかということについては、やりながら考える。
- ・住民感情として海や川は大事、まちづくりと一緒に護岸設計・工事も進めたい。

- ・除染してもゼロにならない。除染しなくてはできないことではなく、除染しなくてもできることを考える。
- ・コンパクト、高密度、高層化のまちづくり。
- ・低線量のがれきをコンクリートの中に封じ込めて、護岸工事に使う。実際にこういう実験をやった。仮置き場に置くがれきの量を減らす。
- ・千葉県の富士フィルムに、浪江町の土を持っていき、除染の実験をしている。2～3割の除染ができています。これを今後、具体的にできないかということを考えている。

委員

- ・その実験は個人的なものか。町で行うものか。

委員

- ・個人的にチームを組んでやっている。公に話したのはここが初めて。

委員

- ・私は、請戸の出身者として漁業が復興されていることを願う。
- ・町に戻りやすい環境に整備されている。町に帰るかどうかわ迷っている人に対して戻りやすい環境。働く世代も帰れる町。最初は小さなエリアからのまちづくり、そして徐々にエリアを広げていきたい。

委員

- ・私の地域では毎月測定をしているが、放射線の線量は平均 10 mSv くらいである。環境省では 100 年は無理と言っている。私たちの世代は帰れないので、将来、子供たち、孫たちが帰れるような町にしなければならない。
- ・私の住む津島は畜産で有名。広い牧草地を整えて、浪江町に綺麗な川の水を還元したい。
- ・町の復興を話合うなら、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難解除準備区域」、区域別に話し合いをしたら、わかりやすい。もう少し建設的な話し合いができる。

委員

- ・線量が下がっていると考えられる 10 年後くらいに、孫達の世代が自由に安心して帰れる町。爺さん、婆さんのふるさとと言えりような町を望んでいる。自然・田園風景のあるふるさと。
- ・原発事故後復興のモデルの町。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・各自出した意見を「将来像」「手段」「具体案」、この3段階に分けてみましょう。
- ・将来像を見た時に何か言葉の足りない部分はないか。
- ・高田委員の「日本一環境にやさしい町」、大波委員の「復興のモデルの町」の意見は、ただ以前の町に戻るのではなく、テーマがある。将来像を描かないと、具体的な話にならない。将来像は、「新しい町のモデル、都市の再生」、「若い世代が戻る安心・安全な町」、「自然」、この3つに大きく分けられるだろうか。

■「中期的なまちづくりの目標を考える (H29.3)」について

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・皆さんが書いた将来像を見ながら「中期的なまちづくりの目標」に向けた必要な取り組みは何か。具体的なことを考えてみたい。平成 29 年 3 月までにどういふ取り組みが必要か。どうなっていてほしいか。

委員

- ・隣接町村と協力したまちづくり。具体的には、双葉町、小高町（現在の南相馬市）との協力。
- ・再生可能エネルギー。
- ・ハウス栽培で生き残る産業。

委員

- ・請戸地区に、ソーラー・風力発電が現実化している。
- ・低線量地域のインフラ整備が終わっている。
- ・6号線、高速道路、JRが作動可能になっている。
- ・除染完了地域から町内コミュニティが完了している。

委員

- ・すべての人たちが自由に出入りできるようになっている。
- ・インフラ・交通整備が終わり、新たな希望を語れるようになっている。
- ・農作物が自由に栽培でき、食する事が出来るようになればと思う。
- ・町の中が事故前の状態になっていれればと思う。
- ・除染はゼネコンがやるのではなく町が受け、地元の業者と町民が行う。

委員

- ・帰宅困難な地域の除染完了。準備区域はすでに終わっているという仮定。
- ・低線量地域の復興住宅の完了。
- ・インフラ整備の完了。
- ・高速道路の浪江I.Cの開通。
- ・権現堂地区は崩壊していて、まちづくりは難しいので、浪江中心地区の復興。役場から西側。新しい住宅のある警察署の後ろ側。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・今の大波委員の具体的な話について、皆さんどう思うか。

委員

- ・東邦レーヨン（昔の製糸工場があったところ）を更地にする。新町通りの裏表はだめ。地盤が悪い。新町通りから西はかなり道路がゆがんでいる。それを考えると役場を中心としたまちづくりが必要。
- ・北棚塩は新しい復興住宅の場所としては最高のところ。
- ・浪江町役場は浄化槽をつけて、水洗トイレが使えるようになった。平成29年までは、町民に会議室などを利用し滞在できるようにする。

委員

- ・まず、帰還の条件がクリアされている。私は具体的に帰還の条件がわからないので、計画が立てられない。帰還の条件を明確にしてほしい。
- ・帰還困難地域の人には戻れない。新しい行政区が誕生し、機能している。
- ・若い人が働いている会社が多数ある。
- ・いつになったら除染が完了しているかを明確にしてほしい。除染の方法も時期も費用もわからない。
- ・個人・共有地の土地・家屋の所有関係が決着していること。
- ・必要な情報の共有化（復興まちづくり計画策定に関して）。

委員

- ・基礎となる産業の確立。これがないと人が帰れない。
- ・インフラ整備。

委員

- ・権現堂地区のインフラ整備。
- ・6号線沿いに商店（コンビニ等）がほしい。
- ・復興住宅。建てられなくても、予定地として決めてほしい。

〈C-2班〉

■「まちの将来像を考える（長期的）」について

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・一つ目のテーマ「まちの将来像を考える（長期的）」では、何年後、何十年後という設定はしていない。浪江町がこれからどんな町になってほしいか。夢や希望なども語ってほしい。
- ・二つ目のテーマ「中期的なまちづくりの目標を考える（H29.3）」では、平成29年3月までにどんなまちになっているのか、どういう取り組みが必要なのか、現実的なことを語って頂きたい。

委員

- ・災害の前のまち（子供が住める）。
- ・地方自治体、住民自治の充実・共生。
- ・浪江町総合審議会条例の改訂・充実。
- ・優先順位。復興の担い手。
- ・仮置場、減容化、施設の設置。
- ・農地、漁港の整備（生産基盤）。

委員

- ・町中心市街等は更地にし、新しい町づくり。
- ・集落のような状態から村から町へと変化、限界集落（町）。
- ・インフラ整備、農地は農業者。

委員

- ・将来若者の帰りたい町、60代以上が先行。10年後は現在50代、20年後は現在40代。
- ・全体計画を立て、帰町の準備の為の復興基地を第一優先させる。
- ・がれき、残骸の無い町。復旧、復興の第一条件「住民参加」。
- ・町は県、国の言う言葉をなくす。法を見直す事を検討。
- ・川、海への放射能の拡大を防止。食する事のできる魚。

委員

- ・高齢化社会に対応したまちづくり。
- ・人口減少化、町の負担が掛からないまちづくり。
- ・浪江町単独での経営は財源的に困難。双葉郡の広域化が必要となるのでは。

委員

- ・長期・短期は区別化しない。「第一次計画」の内容を精査し表現すれば浪江の夢となる。この中で29年3月までに出来る事が短期となる。

- ・具体的な話を進めたい。

委員

- ・高齢者中心のまちはさみしい。
- ・3.11前と同じような町。
- ・空がきれいで花・みどり（コスモス）がある町。
- ・常磐線の西側に住んでいる。常磐線の東側に広がっている町。

委員

- ・海や川や山、自然あふれた町。
- ・人口が増加し、活気のある町。
- ・まずは復興拠点を、後から周辺の整備を。
- ・堀内さんと同じ意見で、今回の計画は第一次復興計画ではなく、その次の計画。会議だけではなく、具体的なことを進めたい。

委員

- ・将来的に帰るのだというイメージを持ちたい。40～50代の人が帰ることにより活気が生まれる。そのためには、法改正をしてでも、復興計画を推進したい。

委員

- ・観光など、活気のある町がよい。自然と花のある観光。浪江町には、春は菜の花、秋はコスモスがある。

委員

- ・大学の研究施設、放射能研究施設もほしい。

委員

- ・放射能研究施設は、檜葉町に持って行かれた。

委員

- ・「観光資源」と「人」と「もの」があればお金が集まる。「もの」を集めるには、生産基盤が必要。

委員

- ・エスエス製薬が戻らなければ、工場誘致するなどして利用したい。

委員

- ・放射能の問題は、国の問題、東電の問題である。技術者として何か提案できないか。放射能シェルターや災害に強い原発施設など。

委員（複数）

- ・そのアイデアは、専門家に任せた方がいい。

事務局（コンサルタント 吉沼）

- ・震災前の浪江の良いまちのイメージを皆で共有したいが、何があるだろうか。

委員（複数）

- ・自然のある町。

委員

- ・住民のつながり。

委員

- ・震災前の状態に戻るの前提。行政が以前に普通に進めてきた計画をもう一度きちんとやりたい。

福島大学 間野博先生

- ・3.11 前の浪江町、皆さんは何がよかったのか。それが若者達の戻るキーワードなのでは。自然だけでなく、町は？農業は？

委員

- ・今はアユ釣りもできないし、山でキノコも採れない。昔はアユ釣りが良かった。

委員

- ・浪江町には、海の幸、山の幸が全部あった。東から西まで土地が長く、自然が豊か。

委員

- ・浪江町は福島県の中でも、珍しく良い所。漁港があり、山があり、川が二つある。小学校が6つ、中学校が3つもある。酒蔵も3つあった。「天王山」「たのしみ」「ことぶき」。

委員

- ・村と町がいくつか合併したから、浪江町には小中学校が多い。

委員

- ・川が多いから、橋も道も多い。管理が大変だが。
- ・浪江町の生活が当たり前を感じていて、町のいい所を自覚していなかった。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・県外に移って浪江町に帰らず申し訳ないと思っている人もいる。人のつながりがテーマにあるとその人たちは嬉しいかもしれない。

委員

- ・商工会の盆踊りをやった。太鼓を叩くために戻ってくる人もいる。

委員

- ・1988年からサマーフェスティバルを5年間くらいやった。町全体で行い、町の補助金なしで、1500万円の予算でやった。

委員

- ・十何か所で盆踊りをやった。

■「中期的なまちづくりの目標を考える (H29.3)」について

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・皆さんが一つ目のテーマで書いた将来像を見ながら、「中期的なまちづくりの目標」に向けた必要な取り組みは何かについて考えてみたい。

委員

- ・インフラ整備が終了している。
- ・復興拠点の確立、役場本庁の帰還。
- ・復興建設事業の全面展開。
- ・町内コミュニティに入居可能。
- ・津波被災地の具体的再生（堤防、漁港、再生エネ、減容化等）。
- ・農地、漁港の整備（生産基盤）。

委員

- ・中心地が更地になり、まちづくりが始まっている。
- ・農作物は作付けできないが、多様な花が咲いている。
- ・がれきの撤去。

- ・農地の除草をし、花を咲かせる。
- ・一時宿泊施設などの整備。
- ・復興組合の設立。

委員

- ・復興基地の準備、平成 29 年 3 月に完成している[①現庁舎、②幾世橋小を小中校に、③住宅地、北幾世橋～棚塩]。
- ・小中高の一貫教育。若者が少ないことを考慮して。
- ・鉄道 J R 開通・広域と地域のバス通行。
- ・幹線道路（6 号、高速道路）全線開通、114 号（トンネル）。
- ・川、海への放射能の拡大を防止。食する事のできる魚。

委員

- ・権現堂地区の 114 号拡幅工事整備（第一期工事、中断中）。
- ・近くで買い物ができるショッピングセンターがあればいい。
- ・帰還できる環境条件整備。
- ・原発の安全性の確保。

委員

- ・帰りたくなるような計画づくり[①働く場、生活利便施設（商店、クリーニング、学校、介護等）、②楽しむ場（いこいの村）、③ある程度の産業復興]。

委員

- ・インフラ整備。
- ・病院や福祉施設の整備。

委員

- ・インフラ整備。
- ・復興住宅の完成。
- ・小中高の一貫教育。
- ・鉄道復旧、仙台～いわき間。
- ・平成 27 年 3 月高速道路の完成（常磐道）。
- ・帰還困難地域の除染（一時宿泊）。

事務局（コンサルタント 吉沼）

- ・インフラ整備の話が多かったが、インフラとは基本インフラ（上水、下水、ガス、電気、道路）のことだろうか。

委員（複数）

- ・そうである。

委員

- ・今回の議論は、一次計画と同じような話をしているように見える。具現化をする話をしないとわからない。進まない。一次計画では具体的なスケジュールが書かれている。

事務局（コンサルタント 吉沼）

- ・平成 29 年 3 月までに具体的に何をするかは書いていない（一次計画を見ながら青山委員に説明）。今回はそれを考える場。

委員

- ・今年度の日程で、残る部会とパブコメ等があるが、年度内にこの計画が出来上がるだろうか。

委員

- ・今回は、我々の希望をまとめる回。

事務局（コンサルタント 吉沼）

- ・高速道路、JR、幹線道路といった交通に関してはいかがだろうか。

委員

- ・常磐高速道路については、浪江町は平成 27 年 3 月開通予定であり、全線は平成 29 年までの予定。

委員

- ・JR に関して、浪江から原ノ町間を復旧してほしい。

委員

- ・幹線道路ではない生活道路は町がやらなくてはならない。

委員

- ・広域バスや近郊のバスを、鉄道の代わり（復旧していなければ）に利用できればいい。

委員

- ・町に広域バスがあれば南相馬とつながる。

委員

- ・e-まちタクシーがある。

○話し合いの共有

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・今日は発表する形をとらず、それぞれのグループ、違うグループでどんな議論があったかということについて、覗いて頂きたい。
- ・説明役の方をひとり残して頂いて、それ以外の方については別のグループに移動して頂く。
- ・移動した時にひとつ宿題がある。自分のグループと共通の議論だと思ったものは青いカードに、自分のグループになかった議論については、ピンクのカードに書いて、お土産として持ち帰って頂く。
- ・今日最初に話をした通り、自分のグループとの違う議論の共有を大切にしていきたいと考えており、ピンクのカードに書いたものを特に大事にしたいが、同じ議論についても記録して頂いて構わない。
- ・全て記録しているとたくさんの量になってしまうので、特に印象に残ったものについて記録をし、持ち帰って頂きたい。
- ・持ち帰ってから、再度議論を行うので、しっかりと記録して頂きたい。

【Aグループ説明】

〈1回目の説明〉

委員

- ・グループ内においても、違う考え方はたくさんある。
- ・まちづくりの目標として、どのようなまちづくりを目指すかということで、私の持論ではあるが、町民が帰還しない町づくり。
- ・これを前提とした場合、避難解除準備区域において土地の所有権の再配置をするべきである。浪江町民以外の町民も含め、ここに住みたい人が住めるような環境づくりを行うことが必要

なのではないか。

- ・循環型のまちをつくる。遠い将来になるが、子供が多い町を目指す。そのためには、学力向上のまちづくりをしていく。これを浪江町のセールスポイントとし、住民を定着させる方向をつくりたい。
- ・研究施設等の誘致・建設。企業誘致に際して、火力発電所等、原子力発電所以外のエネルギーの生産拠点として、立地企業に対して優位に電力を供給できるようなことを行い、町の税収をあげていかなければならない。
- ・高齢者のまちづくりという意見が出ているが、将来にわたって高齢者の町では生産性がなく、駄目になってしまう。町の土地から税収をあげていくための施策を考えていかなければならない。
- ・直近の目標として掲げたものが北の作業拠点をつくるということ。
- ・今は作業拠点としてJビレッジがあるが、南相馬方面からの作業員にとってはかなり不便である。また、通勤時の被ばくを少しでも軽減するためにも、北側に今のJビレッジと同じ機能を持っていく、それには浪江町が良いのではないかという意見が出た。
- ・これが直近の町の再生のスタート地点となる。
- ・それを実現するために、今の低線量地域に居住できる施設、宿泊できる施設が必要となってくる。地元の住民が戻ってきて生活をスタートするというのではなく、いろんな意味で町に戻って来る人の拠点をつくっていく。町外コミュニティのための拠点、作業員の居住のための拠点、一時帰町のための宿泊の拠点、県外からの視察の際の拠点等になるようなもの。
- ・テーマから外れる事項であるが、我々がまちづくりの議論をしている中、農業や漁業、商業等について、別のところで議論され、動き始めている。
- ・そのようないろいろな議論について、我々が知らない状況でまちづくりの議論をすることはおかしいのではないか、情報共有を図っていかないとならないのではないか。
- ・町としてお互い情報共有できるしくみを作っていないと、我々の議論が無駄になりかねないという提言をさせて頂いた。
- ・除染に関する議論は横に置いておくということにしているが、除染に関してもこの1ヶ月間で具体的な話が始まった。その中でも、倒壊家屋に対しての方針は決まっていけないのに、先に除染させてくださいというような順序が違う話が出てきている。
- ・このような状況をしっかりと理解した上で、我々は議論しないとならないし、そういうやり方に対し、復興庁に対して、我々は意義を申し立てても良いのではないかと思っている。

〈2回目の説明〉

委員

- ・まちづくりの目標、まちの将来像を考えるということで、逆の発想ですが、町民が帰還しないまちづくり。原発の作業員の拠点をつくり、そのような人を町に置いたら良いのではないかという意見があった。
- ・ゼロエミッションのまちづくりということで、自分の町でリサイクルしてゴミとかを出さないまちづくり。
- ・原発事故を乗り越えたまちということで、世界的にアピールできるのではないか。
- ・学力向上のまちづくり。子供が町に戻ってこない、町の将来像が描けない。東大に入る人が日本一となると噂が流れると、子供が集まってくる町ができるのではないか。

- ・まちづくりの考え方としては、権現堂地区の更地化。これにより、除染もできるし、新しい町をつくっていく。
- ・企業誘致として、メガソーラーや火力発電所の誘致。
- ・研究施設等の誘致。
- ・エネルギーの地産地消。原子力以外のエネルギーの企業を誘致していく。
- ・まちづくりの優先順位としては、インフラ整備が大前提。
- ・浪江町に来てもらうために観光価値を設けていく。
- ・どのようなまちづくりを目指すかという部分で、高齢者の施設が充実したまちづくり。国内外から高齢者が集まるような、高齢者が住みやすいまちづくり。
- ・次に、平成29年3月の必要な取組みとして、北の作業拠点を設けたら良いのではないか。
- ・また、町の状態として、先行的に漁業等、生産がスタートしている。低線量地区には人が住んでいる。
- ・高線量地区と低線量地区とは思いが異なり、高線量地区の人は自宅に戻りたいという思いが強く、そのすりあわせが難しい。

[質問]

委員

- ・町民が帰還しないまちづくりということは、町民を町に帰さないということか。

委員

- ・帰さないということではなく、復興拠点としたら良いのではないか。
- ・町民にこだわらず、町民以外でもここに住んでも良いという意味も含まれている。
- ・北側に原発作業員のための作業拠点をづくり、いろいろな人が利用するという意味。

【Bグループ説明】

〈1回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・若い人、子供が戻れる町。
- ・周辺は荒廃しているがオアシス的な町。綺麗な町がそこに存在するようなイメージを強く持たせたい。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・インフラ住宅が必要。
- ・医療、福祉の問題。
- ・各企業、個人の取り組みが大事。

[質問]

委員

- ・古くて新しい街とは？

委員

- ・浪江には古くて良いものがある。古くて良いものを活かした町。

委員

- ・独立する浪江町とは？

委員

- ・進んだ地域であるというイメージを表している。

委員

- ・区画整理はどういうこと？

委員

- ・戻らない人もいるので、ある程度集約しないといけないか考える。

委員

- ・荒廃地帯でのオアシスの意味は？

委員

- ・周辺が居住できない中での、安らぐ場所のイメージである。

〈2回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・一番多かったのは、普通の生活ができる町。子供、若者が住む町という意見も多かった
- ・新しい町。まったく新しい町を作る。
- ・再生は今戻れるところを部分的に活かして直していくという考え。
- ・独立する町というのは、そのぐらいの気持ちでやっていこうという意気込み。
- ・古き良きものを生かしていく、古いものを生かすのが今の時代には新しいことだという考えであり、それをまちづくりに活かす。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・優先順位として、生活のための最低限のインフラ。
- ・住むところを確保してほしいという意見。
- ・新しい都市計画を立てるという意見もあったが、時間的に厳しいという意見があった。
- ・高齢者が町で住める社会インフラが必要。医療等。
- ・今住んでいるところより、良い環境を作らなければいけない。
- ・これを形にする人は誰か？個々が行動・実践しなければいけない。

[質問]

委員

- ・区画整理は何をイメージしているのか？

委員

- ・戻らない人もおり、虫食い状態となることもあるので、集約しないといけないと考える。

【Cグループ説明】

〈C-1班：1回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・放射能に汚染された町というのを逆手に取って、「日本一環境にやさしい町」にする。
- ・最先端の自然エネルギーを維持し続ける町にする。
- ・原発事故後復旧・復興モデルの町。帰らない住民もいる。住民だけを対象にするのではなく、世界から人が来ることができるような町に。
- ・海・山・川、自然豊かなまちに戻す。

- ・安心・安全、若い方々が戻れるまち。
- ・自分たちだけではなく、次の世代、孫の世代にまで安心できるような町づくりをする。
- ・漁業の復興。
- ・経済特区の導入による地域経済の活性化。
- ・産学を通じた町づくり。
- ・オランダの最先端の農業の導入。
- ・具体策については、意見が多いので割愛する。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・5年後ということで、より具体的になっていなければならない。実現の有無を問わず、この班で思っている意見を並べている。
- ・最先端の自然エネルギー関連会社が5年後に進出している。ソーラー関連の会社が出てきている。
- ・オランダの農業、ハウス栽培。除染が難しいのでハウス型の栽培を行う。
- ・コンビニがある。生活用品が手に入り、みんながお店を使っているという状態になっている。
- ・インフラに関して、高速道路浪江 I.C の開通。6号道路、JR の交通網が整備されている。
- ・権現堂地区のインフラ整備。
- ・浪江町の中心市街地は、現在の役場のところがよいのではないか。棚塩・幾世橋地区も候補として考えている。
- ・段階的な復興の進め方。
- ・期待・希望について、帰還困難区域の除染が終わっている。区域問わず、誰でも町に入れるようになっている。
- ・条件について、帰還の条件が何なのか、明確になっている。除染完了の線量のレベルはどのくらいなのか。これに関しては、国や町が明示するべき。それによって課題が変わってくる。
- ・土地利用計画が計画通り整備されている。
- ・個人の土地・家屋権利関係が整理されている。
- ・帰還できない人たちを対象とした新しい行政区が誕生し、機能している。
- ・浪江だけでは復旧・復興は難しいので、隣接町村と連携した町づくり。

[質問]

委員

- ・権現堂地区のインフラ整備とある。今までは、復興拠点とするならば棚塩・幾世橋であって、そこに仮設を作ると、また壊さなければならないのでは。

委員

- ・これは班の一つの意見。個人的には、これについては皆でもう少し議論を重ねたい。

委員

- ・新しい行政区についてはどういうイメージか。

委員

- ・浪江町に戻った時に、住むところがない人たちに向けた新しい行政区。今までなかった新しい行政区として再編成をする。人間関係も含めてきちんと機能している状態になっている。

委員

- ・行政区域をずらすとか、名称を変えるのではなく、行政区内の新たなコミュニティというイメージなのか。

委員

- ・何人戻ってくるかまだわからない。規模も含めて検討する必要がある。

〈C-1班：2回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・将来像は夢に近いこと。具体案は行動計画。
- ・オランダ型の農業は参考になることが多い。
- ・具体案では、除染が優先的な案であるという意見が多かった。
- ・復興計画の具体的な手順としては、まず、第一段階で常磐線から東側、第二段階で高速道路から東側、第三段階で高速道路から西側。線量によって区域をわけてまちづくりを始めたい。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・若い人たちが帰って来ることができるような自然エネルギー関連の産業を。今まで浪江町にあった産業を呼び込むことも努力しているが、現実的に2、3社しか動いていない。今後は、産業の中身を議論し検討するべきと考えている。
- ・インフラに関して、下水道・上水道を中心に整備されるべき。
- ・復興の拠点は、役場を中心にしていく。
- ・常磐線より東側から復興をしていく。
- ・環境省を含めて国を中心に除染を進めているが、浪江町も主体的に参加し、線量がどう変わっていくかを肌身で感じる。国任せではなく、自分たちで行動をしていく。

[質問]

委員

- ・「個人・共有地の土地家屋の所有関係が決着している」とは何か。

事務局（復興推進課 横山副主査）

- ・これは前提条件。共有者が多いとか、権利者が亡くなっていて枝分かれしている状況を踏まえたときに、例えばさら地にした時に必要な条件となってくる。

〈C-2班：1回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・災害の前の町に戻ることが将来の目標。自然豊かな町。人口が増加し活気のある町。伝統文化、祭りなど、住民の心のつながりがある町。将来若者が帰りたくなるような町。
- ・住民参加による復旧・復興。
- ・区域について、双葉郡のさらなる合併・広域化、連携が必要。
- ・建設業・農業・漁業の再興。
- ・川・海など周囲の環境に対して放射能の拡散の防止。魚を食べられるように。
- ・全体計画を立て、復興基地の整備を優先。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・インフラ整備が終了している。（鉄道復旧と広域バスの運行。国道6号、常磐高速道路の開通、114号の整備。）
- ・復興拠点の確立。浪江町役場の帰還。幾世橋小を小中校に。一時宿泊施設、病院や福祉施設の整備。

- ・復興組合の設立。建設業の展開。
- ・住居地域の除染、がれきの撤去。

〈C-2班：2回目の説明〉

委員

[まちの将来像を考える（長期的）]

- ・将来像は、震災前と同じような町にしたい。自然環境豊かな浪江町に。
- ・観光資源、大学・研究施設、企業誘致をするなど、仕事がある町に。
- ・「できない」ではなく、「できる」ようにしていく住民参加を。
- ・近隣町村と連携し、双葉郡の広域化を考える。
- ・建設業の復興、そして農業の復興。

[中期的なまちづくりの目標]

- ・インフラ整備の終了。(JRの開通（できなければバスの代行）。高速道路の開通は平成27年3月までにやってもらう。生活道路の整備)。
- ・復興拠点の整備。(浪江町内に役場機能が帰還。町内コミュニティに入居可能。一時宿泊施設の整備。買い物ができるショッピングセンター。小中高の一貫教育。病院の整備。働く場、楽しむ場の整備)。
- ・復興組合の設立。
- ・下水道の整備、浄化槽の設置（3年あれば復旧可能か）。
- ・がれきの撤去。農地の除草。草刈りをして花の種をまく。

○まとめ（有識者助言）

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・議論の時間は確保していたつもりであったが、かなり急ぎ足になってしまった。
- ・Cグループでは、時間が足りずに、合宿をしないと駄目だという意見もあった。
- ・これから具体的な各論に入っていくので、合宿という形でエンドレスに議論しても良いかと思っているが、まずは今日の議論にご協力頂き、ありがとうございます。
- ・今日は自分のグループ以外について覗いて頂いたので、他のグループでどんな議論があったのか何となく理解して頂けたかと思う。
- ・Cグループの意見についても、若い人のグループにはなかったり、逆に我々が議論していなかった意見があったり、そのような部分が確認できた。
- ・よって、今日は皆の意見を一通り、共有できたということで了解して頂きたいと思う。
- ・有識者の先生方にもご覧頂いているので、ご意見を頂きたいと思う。

福島大学 鈴木浩有識者

- ・今日の議論を踏まえて、自分が考えていること、重要なことを伝えたいと思う。
- ・Aグループの意見の中で、復興に係る個別の事業が具体的に動き始めている中で、このまちづくりの議論とどのように整合させるのかということが出てきていた。
- ・やはり、まちづくり検討部会とは別の事業の動きについて、役場からの情報発信が足りないということにつながっていると感じた。
- ・難しいことかもしれないが、役場からもっと情報発信があると、このような議論に取り掛かる際の要望も変わってくる要素があるのではないかと思った。

- ・また、私がいろいろな検討会に参加する中で、教えて頂いたことがある。
- ・復興交付金に係る事業が5省庁40事業あり、これに該当するものについて、担当省庁が決まったものについては、縦割り行政の中で進められていく。
- ・しかし、5省庁40事業に係らない事業については、ふらふらしていて、これらの事業をどうやって受け止めるか、このために復興庁は存在しているはずである。
- ・例えば、このまちづくりの中で最初から言っていることであり、第一回目にも話をしたが、低線量地域のうち、災害危険地域として新しい絵が描かれれば、その住民の人達は防災集団移転事業ということでまちづくりをイメージしていくということが考えられる。
- ・この防災集団移転については、具体的になれば、国交省の事業として粛々と動いていく。
- ・しかし、津島や赤宇木等の高線量地域の人達も同じように戻れないのに、津波被害を受けていない地域の人達、原発被災者のための防災集団移転事業のようなメニューはない。
- ・よって、もし浪江町が急いで防災集団移転事業を津波被災地の方にかけてしまうと、津波被災者のためだけの事業になってしまい、高線量地域の人達も想定した最終的な移転場所というものを確保できなくなってしまう。
- ・浪江の場合は、防災集団移転事業の拡大解釈をしたような事業を考えなければならない。これは、復興庁が新しいメニューとして考えないといけないということになる。
- ・浪江町のように、原発の問題も抱え、津波の問題も抱え、その中で復興拠点をつくっていきこうとすると、応用問題がたくさん出てくる。
- ・我々はそのことを考えながら、復興拠点、復興前進基地をつくるということになる。
- ・高線量地域の人達はしばらく自分の家に戻れなくても、低線量地域に短期滞在型の住宅、私はふるさと住宅と勝手に呼んでいるが、そのようなものを作る。それを利用してお墓参りをする、年中行事の時に皆で集まる、そういうものを作ろうというのは、いくつかのグループで出てきている。
- ・私はものすごく重要な事業だと思っており、町の機動力、出発点になるのではないかと思っている。
- ・どのような事業でそれを実現するのかということについては、今のところ事業制度がはっきりわかる訳ではないが、復興庁に認めてもらうことは重要である。
- ・手順としては、最初の段階でふるさと住宅を作ったら良いのではないかと思っている。
- ・私は福島で6,800戸の木造仮設住宅を作り、現在、この仮設住宅の再利用を考えているが、なかなかうまく進んでいない。
- ・浪江町にその木造仮設住宅の規模を大きくする等、有効利用して、地域滞在型の住宅をつくるということが出来ないかなど、皆さんの意見を聞きながら、私もそういう考えを膨らませている。
- ・いずれにしても、現在どのような事業制度の中で、この委員会が動いているのか、双方向の議論が重要だということが、今日感じたこととして申し上げたい。

住まいの研究所 鎌田一夫有識者

- ・ご苦労様です。私は2点だけ、お話ししたい。
- ・1点目は、昨年、復興計画の案を策定した時、復興拠点というイメージは議論の後半の方に出てきて固まったような気がしている。
- ・よって、復興拠点が委員の皆さんにどれだけ共通の認識になっているか、すごく心配をしていたが、今日の議論を聞いてみて、どのグループも復興拠点については共通の認識、イメー

ジを持っており、浪江町全体として、あるいは浪江町の周辺地域も含めて、低線量地域を拠点として使っていこうという共通認識があったのではないかと感じた。

- ・それについては、私が考えていたものと大きくずれていないと感じている。
- ・一方で、拠点をつくるためには、きちんと整備しないといけないという意見があったが、私は今の時点で、そんなに固く決めてしまわない方が良いのではないかと考えている。
- ・その理由としては、宮城県のある町で、高台移転と高盛土というかなりインフラ整備を伴うまちづくりを考えていたのだから、実際に動き出してみると、当初の予定の6~8割くらいの人口しか戻ってこないということになり、インフラの見直しを行っている。
- ・一例ではあるが、原発災害のない地域においても将来が読めないことがあり、原発問題の場合は、それ以上に将来が読めないところがあるので、フレキシブルに考えていくことも必要なのではないかと。
- ・持続性を持たせながら、できるだけ変化に対応できるような拠点のイメージを、これからの皆さんの議論の中で固めていけたら良いと思う。
- ・2点目は、鈴木先生の意見と似たような意見を別の角度から申し上げるが、部会で議論したことが、きちんと町の計画に反映されていくことを町にお願いしたい。
- ・もちろん、皆さんはここで議論した内容、要望がそのまま実現するというふうには思っていないと思うが、実現できない場合はどういう理由なのか、これをしっかりと説明してもらう必要があると思う。
- ・昨年の部会において、たくさん議論したことが反映されていなかったという意見がいくつか出ていたが、そういうことがないようにして頂きたい。
- ・実現できることが一番良いが、できなかった場合についても、どういう経緯で実現できなかったのか、皆が理解できるように説明していく、そういう進め方をして頂きたいと思う。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・ありがとうございました。
- ・鈴木先生からは、様々な法規制をめぐる問題、及び我々の部会の議論と並行して進む他の事業についての情報提供をきちんとする必要があるのではないかとのご指摘があった。
- ・鎌田先生の方からは、復興拠点に関する問題と、この部会での議論がきちんと形になっていくことに対する確認のお話が頂けたと思う。
- ・今日はまちづくりの全体像、目指すべきまちの形、目標について議論した。これらの議論を受け、次は復興拠点、低線量地域の土地利用という具体的な話、次の段階へ進んでいくことになる。
- ・もちろん、今日の成果を受け、また、皆さんの意見を踏まえ、進め方についても検討していくことになるが、予定としては、次回は具体的な各論の話に入っていくという段取りで進めていきたい。
- ・今日の議論の中身、内容について、伝えておきたいこと等があればお願いしたい。

○質疑応答②

委員

- ・グループ分けについて、今回のテーマについて、年齢別で行ったことによるメリットはなにかあるのか。そこから何か新しいものが得られるのか。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・世代別で考え方に違いがあるのではないかとということで、今回まで年齢で分けさせて頂き、議論して頂いたが、その違いを今日、確認して頂いた、気付いて頂けたのではないかと思います。

委員

- ・テーマによっては、確かに年齢によって議論するというのもあると思うが、今後もグループ分けを続けていくのであれば、事前にテーマを出して頂き、そのテーマに興味のある方や専門知識がある方を優先的にグループ分けするという方が有意義ではないかと思う。
- ・一次計画をもっと具体的にしていくのは今年度だと思っており、いつまでもレベルが上がらない、具体性が出てこない、そのような話し合いに時間をかけるのはもったいないような気がしてならない。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・ご意見として確認させて頂いた。その他はどうですか。

委員

- ・総括として、鈴木先生からは個別の事業に縛られる部分があり、一つの問題がなかなか解決しない、いろんな縦割りの中でなかなか進んでいかないというお話があったこと、鎌田先生からは復興そのものは進めていかなければならないけれども、勢いで決めていくものではないというお話を頂き、非常に参考になった。
- ・ありがとうございました。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・感想ということで、よろしいでしょうか。他にありますか。

委員

- ・今回の部会の中で、前提条件についての話し合いはほぼ終了したというような印象を受けたのだが、個人的には前提条件については全く終わっていないと思っている。
- ・特に課題の把握とあるが、まずは問題があって、その問題を解決するための課題があるという順番になっていけないと思っているが、最初から課題が出てきているとその問題は何なのかと思う。
- ・今日の最初の質疑応答で申し上げたが、その問題の把握、現状の把握ができていない。
- ・この現状把握があって、それを解決するための課題があるということであれば理解できるが、前提条件の話は終わりというということになると、そのような認識はないので、どういうふうに理解すれば良いのか。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・おそらく私が言ったことについてだと思うが、終わりとは言っていない。
- ・今日冒頭でも役場から説明があったように、前提条件についてはアンケートの結果も含め、随時情報を出していくということである。
- ・また、私が答えるのもおかしいが、前提条件は一体何なのか、整理が必要だという高田委員からのご意見については、私自身も理解しており、議論が必要だと思っている。
- ・もし、私がお伝えした中で、前提条件は終わったというように伝わったのであれば、それは誤解なので、ご理解頂きたい。

委員

- ・復興計画を策定してから10カ月間、放置された状態であり、今日はもっと具体的な話になると思っていたのがっかりしている。
- ・幹線道路の問題、漁業の問題、除染基地の問題、復興拠点の問題等、前回の方が具体的なものが出来たのに、何でもっと具体的な形に持っていけなかったのかと思う。
- ・町からの情報の話が出たが、約10カ月間、町が何をしているのか、イライラとした気持ちでいた。
- ・帰りたい人、帰らない人、帰れない人、いろんな人がいる。皆どうしたら良いのだろうと悩んでいる状況であり、そういう話を毎日のように聞いている。
- ・復興計画をもっと具体化していく、浪江町の復興拠点をどこにつくるのか、復興住宅や災害公営住宅についても話が出ているが、浪江町には一軒も建っていない。
- ・一方、原発被害のない南相馬市、いわき市については、復興住宅が建て替わっている。
- ・町が大人しすぎると思う。
- ・一日も早く、今まで出てきたものを具体化し、前へ進めて頂きたい。

委員

- ・鈴木先生から国の予算問題、政策の問題の話があったが、私は今回の町の復興計画においてはそれがポイントになると思う。
- ・いくら我々がいろいろと議論しても、裏付けができなければ、机上の空論になると思う。
- ・鈴木先生は一次計画に係られており、一次計画に詳しい。鈴木先生のご指摘の通り、一次計画に基づいて、具体化できるものは具体化していく必要があると思う。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・いろいろな事業が他の部局、他の段階において進んでいることについては今回確認されたことであるので、それらの情報提供については、事務局にお願いしたい点である。
- ・今回、いろいろなご意見があったことが確認されたが、例えば、鎌田先生からお話があった復興拠点に関する認識及び共通する事項が確認できたという点は、前に進めていく上で、基盤としての意味合いがあったと思う。
- ・私が参加していたCグループにおいては、3.11の前に町に戻してほしいという意見を皮切りに、3.11の前とはどんな町であったのかという議論を皆で行った。
- ・それを行う中で、皆の認識が違っている点、共通している点の確認され、このように今回の議論を通じて、共通して認識できた部分、改めて目標として確認できた部分があったのではないかと思う。
- ・最後に、前回の終わりの時に事務局に対し、部会の意見を整理した後、次回の会の進め方については、各委員さんの意見を聞いて頂きたい、それに基づいて次回の進め方を組み立てて頂きたいと申し上げたと思うが、それが出来ていなかったのではないかと考えている。
- ・今回までの意見をまとめるといくつかのテーマが見えてきていると思うので、この後どのように作業を進めていったら良いか等、委員の皆さんに次回以降の進め方についてご意見を聞いて頂くということを、事務局に改めてお願いしたい。
- ・また、委員の皆さんもそれに対するご提案を頂きたい。
- ・ただ、これだけ委員の方がいらっしゃるので、必ずしも、お一人お一人の考え通りに進めることは難しいという点をご了解を頂きたいが、なるべく皆さんの声に基づいて進めていきたいと思っている。その点については、事務局、及び委員の皆さんにも再度確認しておきたい。

- ・今日の作業はここまでとします。皆様、ご協力ありがとうございました。

事務局（復興推進課 近野副主査）

- ・次回、第4回部会は9/24（火）、時間は調整中であるが、午後の時間で調整したい。
- ・今日頂いた目標を踏まえ、次回は分野ごとに検討することを考えている。
- ・事務局からの提案であるが、次回の部会終了後、会費制で懇親会を開催したいと考えている。出欠も含め、正式に皆さんにご案内させて頂く。
- ・部長とも話をする中で、9月上旬（9/12、13、17、18 予定）に浪江町に立入りし、現地を見てみるという機会を設けることを考えている。日程調整後、皆さんにご連絡をしたい。
- ・第5回部会は10/22（火）予定。
- ・第6回部会は11/15（金）・16（土）を予定しており、二本松市内において合宿形式で検討したら良いのではないかと考えているが、皆さんにお諮りした上で決めたい。

〈委員より賛成の声〉

- ・賛成というお言葉を頂いたので、合宿形式での開催を予定することにするが、皆さんの参加状況等を確認し、調整を行い進めていきたいと思う。

以 上